

悲愴なり第二十二掃海艇

滋賀県 久保 清

私の生まれ育ったところは、鈴鹿山脈にて伊賀と近江の国に二分する、分水嶺から、日野川となり琵琶湖へと流れいづる、その清流域の程にある蒲生です。少し北には戦国の勇将・織田信長が築いた安土城址や、国宝を多く有する多賀大社があり、大昔より風光明媚の地です。住民も近江商人が発祥したごとく、忍耐力強く、目的に向かって邁進するという血筋を受け継いだ近江人だと、父祖伝来の言い伝えで育ちました。

両親の許に長男として生まれ、弟二人、妹二人の七人家族でした。父は保険会社に勤務していました。当時としては中程度の生活状態でした。

小学校六年が義務教育でしたが、修了後に旧制中学校へ進学したかったのですが弟妹のことを思っ、高等科二学年卒業でした。そして大阪の本

町の呉服問屋へ丁稚奉公に行きました。そこには昭和十四（一九二九）年四月から昭和十七年三月まで（丸三年）勤務しました。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争が勃発し、国民精神総動員令、国民皆兵、奢侈禁止令、大政翼賛会、加えて聖戦であるとの聖断が下されました。

個人商店、小企業従業員等は軍需産業戦士として徴用が来る。そして工具として労働に従事するとの噂が囁かれていました。私は郷里に帰って農耕に従事することが、食料増産で、自分に適した業務と思つて帰郷しました。そして業務の傍ら青年学校へ行きました。青年学校では退役将校と予備役下士官が教官として、軍人精神を中心に、軍人勅諭五カ条即ち「忠・礼・武・信・質」を結びまでの真髓を学びました。

明けて昭和十八年四月、友達等と十五人で、海軍の特別志願兵を受験しました。五人が合格しま

した。一カ月後の五月一日に舞鶴海兵団への入団が決定しました。五人合同の出陣式を行って頂き、学校の奉安庫の前にて全員「神酒の盃」を頂戴しました。町長さんから祝辞を頂き、自分が代表して謝辞を述べ、桜川駅へと行進しました。現在思い起こして当時の様子が眼の前に浮かびます。血湧き肉踊りました。

五月一日、舞鶴入団、帝国海軍二等水兵の制服に身を包みました。以来学営にて丸三カ月半、海軍軍人としての基礎教育が徹底的に行われました。特にロープの結び方や櫓こぎ、カッター(ボート)、水泳の遠泳訓練などでした。以上で強靱な肉体の鍛練と共に、全員一丸となって勉強しました。甲斐あって無事に全員海軍一等水兵になり、八月十五日晴天の佳き日にそれぞれ配属配置が決定しました。自分は第二十二号掃海艇の乗務の一員と決しました。

第二十二号掃海艇は二千トンです。姉妹艇と二艦にて共同作戦で掃海を行い、浮遊(敷設)機雷

等の爆破、除去、要するに海上の清掃を行い、他の艦艇、船舶の安全運航を助けるのです。なお自艇で守備するための装備としては、艇の前・中・後の三甲板に、それぞれ十二センチ砲を配備していました。

この一門には、射手(高角度)旋回手(横角度)照尺手(左右何度)とそれぞれ任務を分担して、「一致協力」、一つでも不適・不確実であれば成功しません。自分は照尺が主でした。そしてこれには第一番に大きな声が要求されます。何日いかなる時も水兵さんは「大声」で言葉を発すべしでした。

八月十五日、初乗艦日に艇長の藤森大尉より訓示を頂戴しました。要約しますと一艦、一艦「それぞれ乗組員は一心同体である事、一人の不始末が全員の生命に関わる、親兄弟と違って勤務せよ」でした。なお本艇乗務員は一千三百人でした。水兵科には砲科、通信科、碇科があり、他に機関科、衛生科、主計科と工作班数人、これは水兵科に属

します。

自分も艇内勤務内容が少し理解出来るようになった頃の十月二十七日より、能登半島沖から日本海へと海上警備に出動しました。出動の翌日位で、もう初年兵は全員船酔いに苦しみました。胃袋の中に何も無いのに「ゲイ、ゲイ」と吐き気の連続でした。胃液が逆流して口から飛び出しました。先輩達が「鏡のような海で苦しんでおけ、荒海では命掛けだぞ」でした。顔面蒼白で足元はふらふらでしたが、全員十日位で船酔いから完全に立ち直りました。

十一月十日付にて南東方面艦隊へ配置されました。引き続き同月十五日付にて第八根拠地隊付属（トナリR）方面（海面上）防備部隊編入となりました。

四国の佐伯港を出港し、小笠原諸島父島を経て、同月二十一日ラバウルに向かいました。途中サイパンにて第一回目の敵の空襲を受けました。これが敵機との初見参でした。機銃掃射で頭上を弾丸

が飛来するので首が自然に縮みました。勿論この時は陸軍輸送船の護衛警備でした。

十二月十六日、トラック島へ進駐し、仮泊（船艇艦）の休みでした。半舷上陸で英気を養いました。翌日爆音を耳にしました。海軍の水上飛行艇と違っていましたら、米軍機のコンソリデーダの戦爆両用機が三機飛来し、攻撃を加えて来ました。自分達も、一二〇ミリ砲を空に向けて発射しましたが一発も命中しませんでした。

工作班の錨係が「捨錨命令」で錨を切り落とす（この時にブイを付けてきる）。艇の行動を迅速に行うための「捨錨」です。後刻引き返して、「ブイ」を引き寄せて錨を引き上げます。大砲は空に向かつて何十発も発射しましたが成果は無でした。この敵襲で僚船「清住丸」は大破しました。

この「清住丸」は特設巡洋艦で二万総トン級（軍艦不足のため、御用船を改装した巡洋艦）でした。

昭和十八年十二月二十五日「カビエン」にて敵

機の大空襲を受けました。友軍機も多数飛び立って物凄い空中戦でした。敵、味方共に戦い海中に落下するのを目撃しました。超低空の敵機に向かって各艦艇から高角砲や機関銃を乱射しました。自分の艇も損傷を受け、自分も負傷しました。この戦闘では砲身が焼け付いて、砲角が行動不能となりました。僚艇第二十一号も大破しました。輸送の陸軍部隊は全員無事上陸したとの事でした。

艇の横腹（舷側）に機関砲弾が当たり、幾つも穴があいたので、工作班の木工技手が木材にて穴埋め（木栓を打ち込む）大きな穴は鉄板溶接です。それでも浸水しますから、臂力にて腕用ポンプで海水を汲み出しました。昭和十九年一月四日、トラック島にて工作艦「明石」にて破損部の仮修理を行いました。

同年、父島を経由して東京湾に入港し、しばらくぶりに日本の土地を踏みしめました。皇居をはじめ明治神宮と東京見物をしました。

同月二十七日、舞鶴の軍港に四カ月ぶりに投錨

しました。「ドック入り」で大改装の大修理でした。掃海機器を全部取り除き、二五ミリ連装機関砲二門を搭載しました。これで船足が軽くなり、攻撃艇となりました。最速二五ノットで走り廻る超小型戦闘艇となり、対潜魚雷と対空火器を搭載します。

この時点で乗組員は二十人増員された。艇長安田大尉の下乗員は百五十人なつたのです。

昭和十九年四月七日、密かに竹船団輸送となりました。この船団は護衛艦総数五十二隻、輸送御用船は五十隻と言う物凄い大船団でした。満州、朝鮮の港から支那大陸の上海からと、全船南方作戦への動員でした。この時、少し変わった事を一つ見ました。黄海で駆逐艦が一隻「真黄色」に塗っていました。カムフラージュかなと思いましたが。大陸の沿岸添いに四列になって御用船が南下。自分達はその中を前後左右と走りながら対潜、対空の監視をしました。陸地添いに走ると片面警護

でよいからです。船足は遅く八ノット位でした。

バシー海峡で輸送船三隻が敵潜の魚雷攻撃で轟沈しました。潜水艦の上方を快速に進み爆雷投下を敢行しました。何発も何発も発射しました。敵潜も驚いて深海に潜って、機関停止で自分達の去るのを待っていたと思います。そして海没船に乗船していた「陸軍さん」の救助をしました。

四月二十七日、マニラ着でした。ここで一応任務終了でしたが、以来バシー海峡だけは「魔のバシー」として全艦艇は嚴重に注意しました。

五月七日、マニラ出港、今度はサンポアンガに陸軍の護衛任務です。この時にミンダナオ沖にて、二等駆逐艦「帆風」が魚雷攻撃で沈没です。真二つに中央が裂けて、艦首と艦尾のスクリューが中天に起立して、優秀な駆逐艦が一発の魚雷で沈没とは思議に思いました。上官が「弾薬庫の爆発だろう」と言う「アッ」と言う間の出来事でした。幾百千の戦友達が「水漬く屍」となられたのです。

自分の眼の前の惨事でした。全身の毛穴から汗

が吹き出し、ガタガタと身震いしていました。

五月十五日 ダバオ着、

五月二十三日 パラオ着、

五月二十九日 ヤップ着、

等々、島から島へ、そして港から港へと陸軍関係（兵員、物資）輸送と警戒警護の任でした。少しの休憩も無く第二十二掃海艇は働きました。

フィリピンは島が多く、そして港も多くあります。そのため文字通り島から島、港から港への兵員、物資の輸送にも働きました。各港には小さな艇が日本の各港から（船と船主が徴用されて）来ていました。中には老船主もいました。

自分達のような軍艇の乗務者も少しの油断もなく、空と海面を睨んでいました。そしてそれらの行動の日は定かでは無いです。同じような事を何回も何遍も繰り返し行っていると頭が半分呆けました。熱帯呆けでしょうか。

昭和十九年六月二日、南西方面艦隊へ編入のため

めにパラオ港に、同七日、サンボアング、六月十五日、ダバオ、同二十三日、パラオ、同二十九日、ヤップ島とフィリピン南東の洋上にある島々から、ニューギニアの赤道付近に点在する島々の港です。これらの行動は、単艇での行動でなく、常時、海上行動に関しては陸軍の兵員または物資の輸送護衛が任務でした。

カウ港、アンボン港、リットルサル港、アンボン港、ゲベ港、グリ港、アンボン、タナフ等々に活動中に米軍がピアク島に上陸したと無線電信を受けました。敵軍の後方に逆上陸して「この敵を殲滅せむとす」と言つて、水陸両用の上陸用舟艇と最新兵器を満載した精鋭兵団の輸送船団が、米空軍に狙われて猛爆撃を受け、全船が壊滅しました。第二十二掃海艇は「スコール雲の下にて」隠れたようになって難を免れました。この時、友軍救出に向かった時は既に遅く、幾台かの戦車のみ波間に浮かんでいました。水陸両用のために甲板にあつた戦車がそのまま浮かんでいたのです。

た。後刻数人の陸軍兵士が助かったことを耳にしました。

昭和十九年七月七日付にて、第三十特別根拠地隊付となり、同月十四日、ピートン港セラベスに行きました。昭和十九年七月十六日、ダバオ港、引き続きパラオに入港しました。

その時、突如、米軍攻撃機その数百機の大編隊にて爆弾を雨霰と投下され、その次は機関砲や機銃にて戦闘機が乱舞するかのごとく、各船舶や軍艦に襲い掛かって来ました。自分はその時艇首の甲板上で機関砲を発射していました。砲身が焼けて真っ赤になる程発射していました。敵弾が弾薬庫に次に燃料庫に引火し、今にも爆発すると思つた瞬間でした。「退艦せよ！」との命令が出ました。自分は手や足に怪我をしていたが戦友と助け合いながら退艦しました。愛する第二十二掃海艇は青い南国の海深く沈んでいったのです。戦友全員の頬にそして顔に大粒の涙が流れていました。

艇長安田大尉も無念な表情でした。即、特別陸戦隊安田隊と改称されました。ただし兵器は五人に一銃、三八式歩兵銃一丁でした。また、二五ミリ機関砲の葉莖から弾を取って、木栓で閉めて急造の手榴弾を作りました。これを試験のため海中へ投入してみました。魚が沢山爆死して浮かんで来ました。即引き上げて焼いたり煮たりして食べましたが、これは「忙中閑有り」でした。

この手榴弾を全員数発ずつ所持しました。爆発音と殺敵力がありました。ただ安全栓が無いために各人が保持するには要注意でした。海岸線から内陸に数多くの蛸壺を掘って陣地を作りました。

これには陸軍の下士官が来て指導してくれました。「アラカベ山陣地を構築せよ」とのこと、また蛸壺掘りをやりました。この頃食料が不足して来ました。「さつま芋」や現地芋「キャッサバ」など促成栽培して食べました。また夜陰に紛れて現地人の小舟を借りて米軍進駐の島へ斬り込み隊で出陣しました。各人が例の手製手榴弾を十発程持

って行き、米軍の武器や食料を掠奪して来ました。第二次斬り込み隊、第三次隊と襲撃を敢行しました。これには次のような「感状」を受けました。

感 状

パラオ地区集団（在「ヤップ」部隊欠）第三十根拠地隊及び同司令官揮下部隊（在「ヤップ」部隊欠）

集団司令官陸軍中将井上貞衛ハ「パラオ」諸島ノ守備ニ任シ豫テ鋭意戦備士氣ヲ振作シ、殊ニ挺身必殺ノ戦法ヲ定メテ其ノ訓練ヲ努メ、又第三十根拠地隊司令官海軍中将伊藤賢三ハ、海軍部隊ノ戦備ニ関シ創意ヲ加フルコト勘カラス、之カ為將兵齋シク守備ノ重任ヲ自覚シ、陸海軍協力適切ナル戦備ヲ完成必勝意氣ニ充溢敵ヲ待テリ。

昭和十九年九月敵大部隊来攻スルヤ長期熾烈ナル砲銃爆撃ノ下、水陸防備部隊各々克ク韌強ナル戦力ヲ発揚シ「ペリリュ」及「アンガウル」島方面ニ於イテ敵ノ上陸ヲ初動ニ撃破シ、優勢ナル

敵軍遂ニ地歩ヲ占ムルニ至ルモ士氣益々旺盛果敢ナル攻撃ヲ以テ之ニ甚大ナル損害ヲ与へ又夜間海上機動ニヨル兵力増援、水上機ヲ以テスル奇襲好機ニ投シ己二月余ニ亘リ敵ノ同方要域利用ヲ阻止シ、以テ全作戦ニ偉大ナル寄与ヲナセリ。

右ハ盡忠ノ至誠ニ発スル皇軍ノ精華ニシテ其ノ武功拔群全軍ノ範トスルニ足ルモノト認ム。依ツテ茲ニ感状ヲ授与ス

昭和十九年十月二十三日

連合艦隊司令長官 豊田 副武

右の感状のごとく、陸軍と協力してよく戦いました。

十二月十五日、コロール守備隊で陣地構築しました。旧守備隊の砲台跡（大砲は転進し、大きな壕のみがあった）米軍のB 29が数機飛来して来ました。上空を眺めていたら投下する爆弾が見えませんでした。「すわ、一大事」と穴に飛び込みました。間髪を入れずに、壕に直撃弾が「ドカン」でした。

真つ暗で一寸先も見えない。慌てて鉄帽を脱ぎ一生懸命に泥を掻きました。その時六人が生き埋めされていました。外にいた戦友が掘ってくれて光明が一筋見えた時の嬉しさは、今も忘れません。穴から飛び出して万歳をしたかったほどです。戦友の中には指の爪がはがれ指先が血に染まっていた者がいました。

昭和二十年五月頃からは敵機も飛来せず、海上に戦艦も見えなくなりました。ただ食料不足で喰うことに一生懸命でした。さつま芋、キャツサバ作りを精を出しました。また海に行つてカニ、蛸を取り、深い所へは例の手製手榴弾で漁業に励みました。それでも熱帯風土病、マラリア等で死亡する者も多く出ました。食料になる物は何でも食べました。トカゲ、マイマイ（蝸牛）、蛇も蛙も一匹もいなくなりました。全員が栄養失調だと軍医さんが言っていました。

昭和二十年八月十五日、誰かが聴いてきた「オ

ーイ、戦争は終わったと、通信隊の受信機が日本の放送を傍受したぞ」という話でした。自分達は丘に上がった河童です。もう戦争はできなかつた。でも敗戦とは残念でした。

同年九月十一日、米軍がガスバンへ上陸、コロニー（南洋庁があつた所）で武装解除となりました。

昭和二十年十月十四日、パラオ本島清水村へ移動。自分は栄養失調でヒヨロ、ヒヨロでした。米軍士官が点検に来て、病弱者から帰還させると説明がありました。

同月十九日、内地送還第一号で、船は武器火砲一切取り去つた海防艦「福江」でした。一番に乗船させられました。この時点では、日本へ帰国できるか、米本国か豪州へ連行されるか不明で不安でしたが、二十五日に富士山が見えた時は、心の底から嬉しさが込み上げて来ました。

十月三十日、横須賀軍港に着き、上陸して即湯ヶ原海軍病院に転送されました。ちょうど三十日

間療養させられました。

昭和二十年十一月三十日、退院しすぐ復員でしたが、私は軽い傷痕で無事に懐かしい郷土へ帰れましたが、多く多くの戦友が「草むす屍、水漬く屍」となられたことを思えば、私一人が喜んでばかりいられないと思ひました。一瞬にして散華した友、苦しみながら草むす屍となつた友を思います。

現在の日本はそうした人々の死を乗り越えて成り立っています。私も命のかぎり、世の人のために働こうと思います。妻を迎え子供三人で食料増産で農業に精を出し、公職も町議二期八年、農地委員も一期務め、日野川流域土地改良区理事を二期務めています。

南方現地慰問団にも参加して各地を巡拝して来ました。二度と戦争の無いよう念じています。